

まさに七変化！さまざますぎる「妙見」

本展覧会の出品作品の中には、姿は妙見菩薩ではない「妙見」がいる。わけのわからないことを言うようだが、これも「妙見」の大きな特徴の一つだ。

講座コラム②にて、八代地域に現存する妙見菩薩像がほぼ「亀蛇」に乗っていることを紹介したが、妙見菩薩以外にも「亀蛇」に乗っている仏像がある。例えば、階下釈迦堂（八代市）所蔵の木造阿弥陀如来坐像（写真右上）や、講座コラム①に写真掲載した金立院（八代市）所蔵の木造弁才天坐像がそうである。特にこの木造阿弥陀如来坐像は、江戸時代には、八代妙見宮の「本地堂」に祀られていたもの。これもある意味で由緒正しい、「妙見」の別の姿なのである。

なんだかややこしい話だが、江戸時代前期に八代妙見宮執行職を務めていた神宮寺住職・良尋は次のように述べている（意識）。

妙見菩薩の本地本体は「大日如来・釈迦如来・阿弥陀如来・観世音菩薩・地藏菩薩・金剛薩埵・大威徳明王・金剛夜叉」だ！そして「日光・月光」は護身、さらに「帝釈天・吉祥天・自在天・弁財天」はその変身バージョン！要するに妙見菩薩は一つの身で、いろんな姿に変身可能！だから「七体妙見」とも呼ばれているのだ！

※貞享3年(1686)良尋著『妙見大菩薩縁起』（八代市教育委員会『八代市文化財調査報告書第43集八代妙見祭』、2010年に全文翻刻所収）

これを読むと、むしろ「七変化、できることこそが「妙見」の特性であり、良尋はその点を積極的にアピールしているようにすら思える。かつての八代妙見宮では、この特性を体現するごとく、さまざまな仏たち（実は「妙見」）が矛盾することなく祀られていた。これら諸仏の持つご利益は、すべて妙見菩薩の仏徳に通じるという概念があったようだ。

しかし、完全に妙見菩薩と違う姿でお出ましになると、さすがにそれが「妙見」だとはすぐにわからない。写真右下の「妙見神像」を初見したときは、これが一体何の図像かわからずに戸惑った。かろうじて木箱の蓋に「妙見神像」の墨書があり、どうやらこれも「妙見」の一種だとわかったのだが、はたして何なのか。

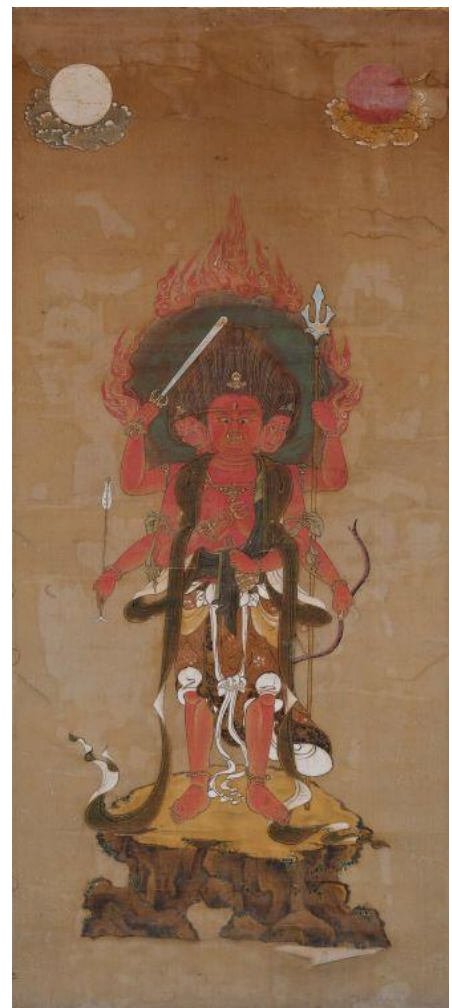
探していたら、この答えも良尋著『妙見大菩薩縁起』に書いてあった。すなわち、妙見菩薩は「天台山（天台宗中国の総本山）では大摩醯首羅天（だいまけいしゅらてん）と呼ぶ。顔は三つ、目は九つ、腕六本。左手に鋒・月・弓、右手に日・箭（矢）・剣を持つ」という。日・月は手にせず上部に描かれているが、その他の特徴は完全に合致する。つまりこれは「大摩醯首羅天」の姿をした「妙見」なのだ。うーん、分かったはいいがやっぱりややこしい。

このように、八代地域の「妙見」はかなり多様な姿・概念でイメージされ、尊崇されていたことが少しずつ明らかになってきた。本展覧会にはありとあらゆる「妙見」が一堂に会している。つかめそうでつかめない、さまざますぎる妙見ワールドを、ぜひこの機会に味わっていただきたい。

【主幹（学芸員） 鳥津亮二】



木造阿弥陀如来坐像 熊本県指定重要文化財
江戸時代（17世紀） 八代市・階下釈迦堂蔵
出品番号 26



妙見神像
江戸時代（17世紀） 水川町・今三神宮蔵
出品番号 42